

徳島県立文学書道館
文学特別展

吉村萬志

——意味のない美しい夢

芥川賞作家による小説の形になる前の“もの”

吉村萬志画「意味のない美しい夢」

2017年 8月 11日 (金・祝) ~ 9月 24日 (日)

休館日/月曜 (ただし 8/14 (月) と 9/18 (月・祝) は開館、9/19 (火) は休館) 開館時間/9:30 ~ 17:00

観覧料/一般 510円 (400円)、高校・大学生 350円 (280円)、小・中学生 250円 (200円)
() 内は 20人以上の団体割引料金、高齢者 (65歳以上) と各障がい者手帳をお持ちの方は半額、
小・中・高校生は、土・日・祝日・夏休み期間中は無料。

主催/徳島県立文学書道館
後援/徳島新聞社、四国放送

会場/徳島県立文学書道館
〒770-0807 徳島市中前川町 2丁目 22-1
☎088-625-7485 FAX 088-625-7540
ホームページ <http://www.bungakushodo.jp>

作家の吉村萬吉は、父が徳島県小松島市出身で、徳島で過ごした小学校の夏休みをモデルに「夏の友」という作品を書くなど、徳島とは深い縁があります。

作品には存在感があり、宇宙人が破壊しつくした地球に生き残った人間を描いた「国営巨大浴場の午後」（1997年 京都大学新聞社新人文学賞）、終末世界で人類が異様な姿に変容していく「グチュクチュバーン」（2001年 文学界新人賞）、普通の人間が次第に暴力性をむき出しにする「ハリガネムシ」（03年 芥川賞）など、独特の作風で人間の本质に迫ってきました。

11年6月に東日本大震災後の石巻市や女川町を見た吉村は、14年に「ボラード病」を発表。静かな語り口でありながら3・11後、社会に蔓延していた「絆」への違和感を描いて、評判になりました。自分の浮気のせいで巨大化していく妻を世間から隠しながら暮らす『臣女』は16年に島清恋愛文学賞を受賞しています。

今回の文学展には、直筆原稿や創作ノートのほか、吉村の小説世界を思わせる絵や造形物も展示します。奇妙な萬吉ワールドをお楽しみください。



関連イベント

吉村萬吉 講演会

○8月11日（金・祝）14：00～15：30
自らの創作について語ります。要申し込み。

テーマ朗読会「吉村萬吉著『生きていくうえで、かけがえないこと』を読む」

○8月26日（土）14：00～15：00
朗読の講座生が吉村のエッセイ集を読む。聴講は申し込み不要。

批評家・若松英輔 講演会

○9月2日（土）14：00～15：30
吉村と対談し、同じテーマでエッセイを書いている若松英輔氏が吉村萬吉作品の魅力を紹介しつづけます。要申し込み。

申し込み方法 はがき・FAX・メールのいずれかに「○○講演会」と明記の上、郵便番号・住所・氏名（ふりがな）・電話番号を記入し、下記までお申し込みください。当館1階受付でも申し込みます。

〒770-0807 徳島市中前川町2丁目22-1 県立文学書道館
FAX 088-625-7540 メールアドレス kotonoha@bungakushodo.jp

意味あんのかよ、こんな世界！

『グチュクチュバーン』より



吉村萬吉

(よしむら・まんいち)

1961年、愛媛県松山市に生まれ、大阪で育つ。京都教育大学を卒業後、教員として働きながら、小説を執筆。2001年のデビュー以降、退廃的 SF や私小説的な作風で人間の嫌らしさ・愚かさをえぐり出すような小説を発表してきた。そのほか、マンガも刊行するなど幅広く活躍している。



マンガ『流しの下のうーちゃん』より



『臣女』創作ノート



直筆原稿「『虚ろまんでいっく』あとがき」



吉村が紙粘土で制作した人形「ボラードちゃん」

交通アクセス

■JR徳島駅から

徒歩(約15分)
JR徳島駅西側のポッポ街を抜けて右折。踏切と助任川を越えて3つめの信号交差点を右折して約300m。徳島中学校東隣。

バス
徳島市営バス 7番乗り場「川内循環線(右回り)」に乗り。 「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。
徳島バス 2番乗り場「前川経由」に乗り。 「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。

タクシー・自動車(約5分)
国道192号線、藍場町交差点を北進。助任川を渡り、4つめの信号を右折して約300m。

■高速道路から
徳島インターチェンジから車で約15分。

■駐車場
当館北側にあります(43台、大型バス2台)。

